

# ワールドランゲージセンター (WLC) 第2ステージの挑戦：現状と今後の課題

尾崎 秀夫、Colin Rundle

創価大学 ワールドランゲージセンター センター長  
創価大学 ワールドランゲージセンター 副センター長

## 1. はじめに

WLCは2018年に開設20周年を迎えた。それを機にWLC第2ステージの開幕と銘打ち新たな挑戦を始めた。一つは、ヨーロッパ言語共通参照枠(The Common European Framework of Reference for Languages: CEFR)に示されるレベルを共通科目英語科目の到達目標に組み込み、世界共通の基準に基づくシラバスを作成することである。もう一つは、目指すべき目標をどのように達成していくかという方法を示すことである。これらにより各科目の各レベルで何を指すのか、その目標をどのように達成するのかを明確にすることができる。本稿では、まずCEFRに基づくシラバス作成の現状を述べ、続いて目標達成の方法となるヒューマンスティックアプローチについて理念と実践方法を説明する。

## 2. CEFRに基づくシラバスの作成<sup>[1]</sup>

WLCにおけるCEFRのシラバス導入プロジェクトは、いくつかの段階を経て、現在5年目を迎えている。本章では、各段階での取り組みの概要を述べ、CEFRの基本原則である「透明性、一貫性、包括性」に基づき、プロジェクト

をどのように推進したかを示す。

最初の2年間、このプロジェクトは、本学の1、2年生が原則履修する共通科目英語科目English I~IVの授業概要と到達目標に、透明性の高いCEFRレベルとCan-doステートメントを追加することから始まった。この取り組みについては、学士課程教育機構研究誌11号において報告した。WLCでは前例のない方法で教員が協力する必要があったため、「カリキュラム開発と教師教育に関し、語学教育専門家として自身の実践を振り返り、教師同士の交流を促進する」(Council of Europe, 2020, p. 11)<sup>[2]</sup>の非常に効果的であった。

次の段階は、WLC教員が教室でCEFRを活用することを支援し、奨励することであり、これは近日発刊予定のPutting CEFR into Practice through Action Research: Reflecting on Principles for Foreign Language Teachingの一章にて報告する。この段階の目的は、言語に関する知識を蓄積するだけでなく、現実世界のニーズを満たすために言語を「使える」社会的主体として学習者を重視する、CEFRの「行動指向アプローチ」を実現することであった。

現段階では、CEFRの手引書であるWorld Language Compassと、CEFRのレベルと原則に基づいた言語学習ポートフォリオであるWorld Language Portfolioを試行している。こ

れらにはそれぞれ目的があり、学生がCEFRについてよく理解することと、在学中およびその後の英語力の向上を記録することである。言語学習ポートフォリオは、行動指向の原則である学習者の自律性に働きかける。進捗状況を確認し、記録することで、学生が自分自身の目標を設定し、振り返ることができるようにする。これらについては、複数のWLC教員が協力し2024年結果を発表する予定である。

今後、実行予定の段階は二つ残っている。一つは、本学の学生、関係者の期待が満たされていることを確認するためのニーズ分析である。これはCEFRが理想とする「逆向き設計」に合致し、共通科目英語科目の内容と構成を教科書や制度上の前提ではなく、現実世界のニーズに合わせることを目指す。残りのもう一つの段階は、CEFRに基づいた統一評価手段の開発を検討することである。このような評価により、すべての本学関係者に対する説明責任を確保しながら、学生が特定のレベルで英語学習目標を達成していることを確認できる。その結果、学生のニーズの把握から成果の確認までのプロセスが完結し、透明性と一貫性のあるCEFRレベルとCan-doステートメントを利用した包括的なカリキュラム改革が実現する。

### 3. ヒューマニスティックアプローチ

外国語教育では、行動主義心理学と構造言語学に基づく教授法が興隆した後、それらとは一線を画す複数の教授法が興った。Tanemura and Miura (2011) は、当時としては新しい試みであった教授法をヒューマニスティックアプローチとして位置づけ、マズローやロジャーズらによる人間性心理学が共通の基盤であると指摘した。人間性心理学に基づく教授法では、学習者の情意的側面や自己意識、自律性等が重んじられ、学習者を全人的に捉える。従って、それ以前において、これらを排除していたかのようなオーラル・アプローチなどとは決定的に異

なる教授法と言える。WLCでは、その第2ステージの挑戦にヒューマニスティックアプローチの推進を掲げているが、本章では、人間性心理学に、自己決定理論が説く人間の基本的傾向性を加え、ヒューマニスティックアプローチが外国語学習に適切と考えられる理由を挙げる。その上で、ヒューマニスティックアプローチを採用する英語科目の今後向かうべき方向を示す。

自己決定理論の基本理念についてKirk (2010) は、統合的指向性、有機体の弁証法的自己変革過程、人間の基本的欲求の3点から論じている。これら3つはそれぞれに関連しているため個別に扱う場合、全体像を見誤る。従って、ここではこれらを一括し、人の変容のプロセスの中で考察する。まず、有機体(生き物)としての人間には生得的に成長や発達に向かう傾向性があるという。この傾向性に基づいて人間は、環境の変化に挑戦し、環境との相互作用を通して自己を適応させる。この生得的な傾向性には統合的指向性が宿る。さらにこの統合的指向性には、個人内と個人間の両面が含まれ、人間はこの両方にわたり統合を希求する。これら両面における統合が十分に成される時、人間は心理的に一貫性を保った、健全な自己を獲得する。その結果、生得的な成長や発達に向かう傾向性も十全に機能する。仮に、個人内でも個人間でも統合がうまく進まない場合、その傾向性は疎外される。

従って、個人内においても、個人間においても健全な統合を図りつつ、生得的に成長・発達に向かう傾向性を維持することがふさわしいが、これらは外的な環境要因に多大な影響を受けるとされる。外的な環境要因がこの傾向性を強めるのであればよいが、逆に弱める場合もある。人間が個人内でも個人間でも統合され、環境と効果的に関わることであればできるほど、人は一貫性を保ち、健全な自己を得られるが、それができない場合は、分断され、疎外感を抱く。言い換えれば、人間の生得的に成長・

発達しようとする傾向性は、外的な環境要因の挑戦を受け、人はそれに適応して自己を再編成するか、うまく適応できず現状にとどまるか、或いは後退するかのいずれかになる。このプロセスは、有機体としての人間に課された弁証法的自己変革過程と考えられる。

Deci and Ryan (1985)によると、ピアジェ、モンテッソーリ、マズロー、ロジャーズらも人間に内在する自己実現の傾向性を認めており、自己決定理論が説く人間の生得的に成長・発達しようとする傾向性と響き合う。しかし、自己決定理論が独創的なのは、自律性、有能性、関係性という人間の3つの基本的欲求を定めていることである。これら3つの欲求が満たされた場合に人間は内発的に動機づけられ、自己実現・自己変革のプロセスをたどりやすい。自律性とは、自分の言動の出所は自分自身であり、それを統制するのも自分自身であるという意識である。有能性とは環境と効果的に関わっていることを実感すること、関係性とは周囲から受け入れられていると感じることと言える。これら3つの基本的欲求が相まって人間は外的な環境要因に果敢に挑むことが可能になる。

以上、Kirk (2010)に従って、自己決定理論の基本理念である、統合的指向性、有機体の弁

証法的自己変革過程、人間の基本的欲求を概観した。冒頭で、ヒューマンスティックアプローチの基盤には、マズローやロジャーズらによる人間性心理学があると述べたが、その洞察に自己決定理論の基本理念を加えると、ヒューマンスティックアプローチの特色に新たな視点は生じるだろうか。以下に自己決定理論が説く有機体の弁証法的自己変革過程を図にして示す。

図1において、統合的指向性を持つAが、Bという外的・環境要因との関りを経て、Aにおいては生じていなかった、個人内と個人間の統合を果たしたA'に変貌を遂げたことを示している。AやA'の脇に描かれた図形は、断片化されていた自己(A)が統合された自己(A')となったことを表現している。A"においては外的・環境要因の影響により断片化が一層進んでいる。Aがより統合された自己A'となるか、断片化がさらに進んだA"になるか、その分かれ目は、外的・環境要因の影響を受ける際、人間の基本的欲求を満たすことができるか否かにある。自律性、有能性、関係性という人間の基本的欲求は、認知能力とは別のもので、より情意的、自己実現的、社会的な性質を持つ。Tanemura and Miura (2011)は言語教育の必須目標として、認知的、言語的、情意的、社会

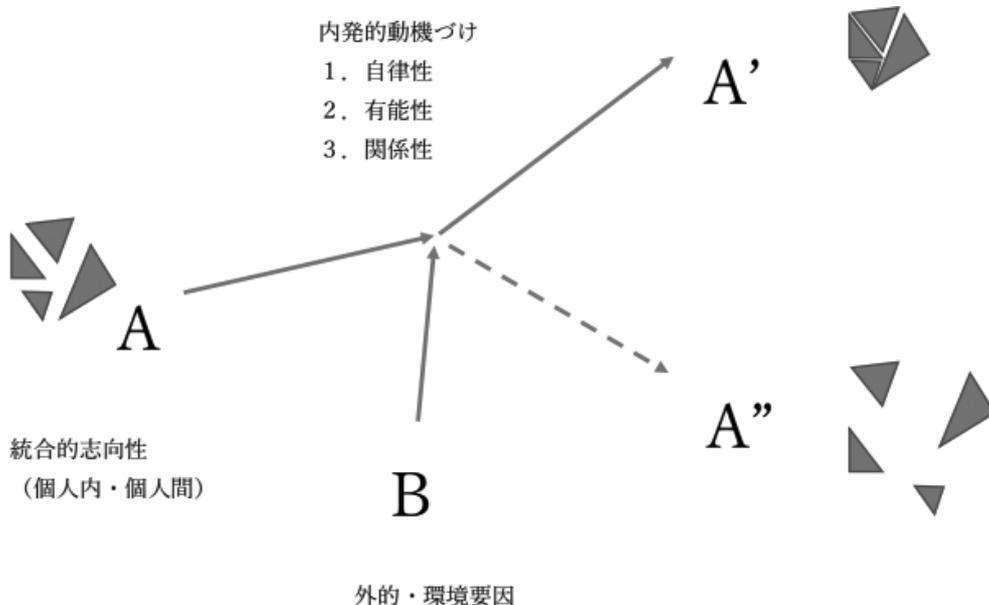


図1 有機体の弁証法的自己変革過程

的能力、自己実現の5つを挙げているが、この点において両者は合致する。ただ、人間の基本的欲求である自律性、有能性、関係性という概念からは、学習者が取るべき行動を指し示す具体性が感得される。この概念を、Tanemura and Miura (2011) が捉えるヒューマニスティックアプローチの特徴に上手く加えられれば、自己決定理論がヒューマニスティックアプローチの理解に新たな視点を追加できる。

いずれにしても、新しい知識やスキルを認知能力だけに働きかけて習得させるのではなく、人間が生得的に持つ成長や発達に向かう傾向性を引き出し、立ちはだかる困難を人間の基本的欲求を満たしつつ乗り越えさせる方法が好ましい。外国語は一朝一夕に身に着くものではなく、長期間にわたるたゆみない努力が必要となる。その途上では、何度も目的を確認し、学習方法を変えていく必要も生じる。これらに対応するには非認知能力が必要であり、認知能力に偏重することなく、非認知能力の役割を十分に活かすヒューマニスティックアプローチを採用することが望ましい。

それでは、ヒューマニスティックアプローチが標榜する全人的教育観に立ち、人間の基本的欲求を満たしつつ、学習者が新しい知識やスキルを習得していくには、教室内活動をどのように計画するとよいだろうか。それには、学習者中心であることを前提とし、知識やスキルを他者と協同して身につけていくプロセスを設けるのがよい。その中で、目的の確認、自分と他者の役割、学習の結果得られるものの理解、失敗の許容、振り返り・評価と修正、再チャレンジの機会、全体の振り返りとする。このように導線を引けば、これまでの議論を踏まえたヒューマニスティックアプローチの活動を計画できるであろう。

より具体的には、習熟度において基礎・初級の場合はタスク中心指導が有効と思われる。特に Wicking and Tamura (2022) に見られる他者との協同によるタスク活動には、目的の確

認、実行、振り返り・評価、再チャレンジ等の要素が含まれることが多く、これを一つのモデルとすることができよう。また、中・上級者には学習者の専門性を意識したプロジェクト中心指導が適切かもしれない。学習者が所属する学部の学習内容を反映させた、問題発見・解決型のプロジェクトを推進する過程に、目的の確認、自分と他者の役割、学習の結果得られるものの理解、失敗の許容、振り返り・評価と修正、再チャレンジの機会、全体の振り返りを含めることができる。プロジェクトの最終場面では、当該分野の専門家を招いたプレゼンテーションをすると、社会へと視野を広げる機会になる。また、テクノロジーを使い、日本以外の国・地域の学生と共同プロジェクトに取り組むことも可能である。

WLC の第2ステージにおいては、CEFR に基づいた英語科目のシラバス編成により、学習者が目指すべき目標を定めている。定められた目標を達成するための具体的な方法としてヒューマニスティックアプローチを採用する。目標と方法の両面にわたり、さらに精度を上げ、効果測定段階に移行したいと考える。これらをもって第2ステージにおける WLC の発展に寄与していく所存である。

## 注

- 1 第2章は第二執筆者が英語で執筆した。第一執筆者がそれを日本語に訳した。
- 2 引用箇所は第一執筆者が英語から日本語に訳した。

## 引用参考文献

Council of Europe. (2020). *The Common European Framework of Reference: Learning, teaching, assessment. Companion volume*. Retrieved December 1, 2023, from <https://rm.coe.int/common-european-framework-of-reference-for-languages-learning-teaching/16809ea0d4>

- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum Press.
- Kirk, S. (2010). Self-determination theory and education: An overview. *The Journal of the Institute for Language and Culture*, 14, 35-58.
- Leighton, R. (2015). The learning line — What goes up will go down first. In I. Gilbert (Ed.), *There is another way*. Carmarthen, UK: Independent Thinking Press.
- Tanemura, A. & Miura, T. (2011). The main current of humanistic language teaching and its contemporary significance. *Bulletin of Faculty of Education, Shizuoka University*, 42, 83-118.
- Wicking, P., & Tamura, Y. (Eds). (2022). *Get things done Book 1 Tasks for connecting the classroom with the real world*. Tokyo: Sanshusya.